

「ケージとシェーンベルク」 解説

二〇一二年は作曲家ジョン・ケージ（一九一二～一九九二）の生誕百年にあたる。「偶然性の音楽」の創始者として知られるケージは、二十世紀後半の前衛音楽のみならず、舞踏や美術など現代の芸術活動全般に決定的な影響を与えた。キノコの研究家としても知られた。

一九八九年には日本の稲森財団から「京都賞」を受賞している。筆者は推薦委員のひとりとして祝賀ディナーに出席したが、われわれ日本人のほとんどが洋服を着てフランス料理を食べていたのに、ケージだけは羽織袴で日本料理を食べていたことを思い出す。そんな意外な行動によって、やんわりと現代の文化的問題を提示したのはさすがケージである。

そんなケージが若き日に、オーストリアのユダヤ系作曲家で十二音音楽の創始者として知られるアーノルト（アルノルト）・

シェーンベルク（一八七二～一九五二）に作曲を師事していたというのは意外な事実である。シェーンベルクはナチスの迫害から逃れ、カリフォルニアに亡命していたのである。

明治学院大学芸術学科・言語文化研究所はジョン・ケージ生誕百年にちなみ、二〇一二年五月十九日（土）午後二時～五時、アートホールにおいて、ノース・キャロライナ大学特別教授セヴリン・ネフ女史を講師に招き、講演会「ケージの対位法／シェーンベルクの対位法」を開催した。この講演は日本音楽学会東日本支部特別例会を兼ね、日本アルバン・ベルク協会の共催も得たため、多数の来場があった。

ネフ教授の講演の後、休憩を挟んでパネル・ディスカッション「シェーンベルクとアメリカ」が行われた。パネリストはネフ教授を中心に、夫君でもある作曲家のジョエル・フエイギン

(カリフォルニア大学教授)、佐野光司(桐朋学園大学名誉教授)、石田一志(音楽評論家)、沼野雄司(桐朋学園大学准教授)、川本聡胤(フェリス女学院大学准教授)の各氏。司会は樋口隆一(本学教授)、通訳はネフ教授の教え子でもある川本聡胤氏がつとめた。本特集は、ネフ教授の講演原稿を中心に、パネリスト各氏の報告をまとめたものである。